

⑩ 天草農業研究所（59年間の主な業績）

1 農業試験場天草試験地

昭和28年（早期水稻の試作）

天草では、サンカメイチュウの被害を避けるため、20数年にわたり水稻晩化栽培を徹底してきたが、台風被害、土壌的要因による秋落ちの常襲、水不足による干害が問題となった。そこで、これらの災害を回避し収量増加と農業経営の安定を図るため、早期水稻の試験栽培を行った。

昭和29年～（早期水稻の現地試験と普及）

本渡農業改良普及所と共同で本渡市、栖本町において現地試験を実施し、好成績であった。翌年には本渡市、松島町、有明町、栖本町、河浦町、牛深市の各市町で試作を30haに拡大した。昭和33年の早期栽培面積は、天草地域全域で3,053haと以後急速に拡大した。

早期水稻は、天草の浅耕土漏水田、秋落田によく適合した稲作法であり、天草地域への適性が高く評価され地域一般の農家へ年々急速に普及浸透し、現在に至っている。

2 天草農業研究指導所、天草農業研究所

昭和24～51年（中玉文旦「大橘」（パールカン）の推挙）

「大橘」は明治の頃から鹿児島県下で栽培されていたが、昭和24年に果樹試験場天草分場が、鹿児島県垂水柑橘分場より導入し、以降適応性検定を行ってきた。その結果、特性の優秀性が認められ、昭和51年2月6日に熊本県果樹品種系統小委員会に推挙、県奨励品種に採択された。以降、天草地域に広く普及し、天草地域の特産果樹の産地化に大きく貢献した。

昭和43～46年（ポンカンす上がり防止対策試験）

高しゅう系ポンカンのす上がり現象は、樹上よりも貯蔵中に増加する。そこで、採取時期と果実予借法との関係を明らかにするための試験を行った。その結果、収穫適期の着色度は概ね7～8分であり、収穫後の予借程度5～10%を目安に急速予借を行うことで、貯蔵中のす上がりは抑制されることを明らかにした。以後、これを基準に産地においても改善が行われ、品質向上に大きな成果を挙げた。

昭和45～52年（ポンカンの施肥基準の策定）

県果樹試験場と共同で本渡市下浦町において施肥適量試験を行い、ポンカンの施肥基準を策定し、指導指針とした。

昭和53～55年（高品質な早期水稻品種「コシヒカリ」導入に対する研究）

恒常的な米あまりに対応するため、天草地域では自主流通米の出荷拡大を目的として「早期出荷用銘柄米緊急確立事業」（昭和53～55年）に取り組み、8月上旬収穫の優良品種選定を目指した。天草農業研究指導所では、供試した水稻14品種中で最も収量品質が優れた「コシヒカリ」を、天草地域の早期栽培に適した品種に選定した。加えて「コシヒカリ」の安定多収技術確立のため、施肥法と倒伏防止技術に関する試験を行った。

これらの成績を踏まえ、昭和56年の奨励品種審査会に於いて「コシヒカリ」が県の認定品種に採用され、天草における「コシヒカリ」普及の礎となった。

平成2年（冬獲りレタスにおけるべたがけ資材の利用）

天草地域の基幹品目であるレタスについて、2月どりの作型における生育促進と凍霜害の防止を目的として、べたがけ資材の利用技術を確立した。ポリプロピレンの長繊維不織布を用いトンネル内べたがけを行うと約3℃の保温効果が期待され、被覆期間は結球後期から収穫までの15～20日程度が適当であることが明らかになった。



レタス栽培ほ場

平成5年（「なつのだより」による早期水稲の収穫早進化）

早期栽培における極早生品種「なつのだより」は、桿長が「コシヒカリ」より15～20cm短く耐倒伏性に優れ、また成熟期が「コシヒカリ」より8日早いことから、「コシヒカリ」より早期の出荷が可能となった。

平成6年（「大橋」の受粉樹「河内晩柑」混植による受粉作業の省力化）

「大橋」の栽培では、受粉作業が規模拡大の障害になっていた。そこで、河内晩柑を受粉樹として20～25%ほど混植することにより、受粉作業に要する時間（37.5時間/a）の省力化が可能になった。

平成7年（水稲認定品種「峰の雪もち」の特性）

早生品種「峰の雪もち」の天草地域における栽培特性を明らかにした。「峰の雪もち」は従来の早期栽培地域で栽培されていた「宮崎もち」と収穫期がほぼ同じ早生品種で、「宮崎もち」に対して短稈、多収であり、外観品質・食味共に優れることを明らかにした。

平成8年（天草東南沿岸地域のビワ適地診断）

天草東南地域へのビワ振興の一環として、幼果の寒害程度で凍死率30%以下を基準として適地診断を実施し、天草2市8町について、栽培適地を明らかにした。

平成9年（カンキツ「不知火」の安定生産のための収量構成）

「不知火」の露地栽培は、結果期に入ると樹勢低下が懸念されていたため、生産性の高い収量構成を検討した。成木で収量4t/10aを生産できる着果数等が明らかになり、「不知火」の栽培管理技術の基礎となった。



「不知火」果実

平成11年（「河内晩柑」の後期落果防止技術）

「河内晩柑」は樹勢が弱いと後期落果するため、施肥と水管理及び落果防止剤を組み合わせた後期落果防止技術を確立した。9月上旬に施肥し、雨が少ない年は肥効を高めるために20mm程度（降水量換算）のかん水を行い、10月下旬と11月下旬に落果防止剤を散布すると、後期落果を軽減できることが明らかになった。



「河内晩柑」の果実（左）と後期落果（右）

平成 13 年 （天草地域における自生花き「カノコユリ」の栽培技術確立）

天草に自生する「カノコユリ」から優良系統を採取・選抜し、栽培技術を取りまとめた。成果を『天草自生「カノコユリ」栽培管理マニュアル』にまとめ、天草農業改良普及センター及び県花き協会天草支部と共同で発行した。



平成 17 年 （早期水稲後の露地スナップエンドウの栽培技術）

天草地域の早期水稲後の水田を活用した、スナップエンドウの露地栽培技術を確立した。早期水稲後スナップエンドウは 11 月上旬から降霜まで収穫が可能であり、抑制栽培スナップエンドウの出荷量が少ない年内に、低コストで 100～150kg/10a 生産が可能である。

また、平成 21 年度には、施設を利用したスナップエンドウの促成栽培における長期安定生産技術を取りまとめた。



収穫期のスナップエンドウ